

## 大学で経験した授業の職業的意義—社会人第2回調査の結果から

二宮 祐（群馬大学）

若手職業人が持っている仕事と大学時代の授業との関係の認識について、同一の人物を対象とする2時点（2015～2016年と2018年）における聞き取り調査の結果を比較して検討した結果、その内容に大きな違いはなかった。他方、第2回調査を対象とした分析においては、現在従事している仕事において学生時代の専門分野に関連した知識を使用することに言及がある場合に、現在自らが仕事に関して学習を継続していることが主張される傾向があった。仕事に関連する学習の経験が積み重ねられることによって、学生時代の学習についての職業的レリバンスが事後的に認識される「職業的レリバンス認識・学習習慣相乗効果仮説」が示唆される。

キーワード：職業的レリバンス／社会人／法学／社会学

### 1. 本論の目的

本論の目的は大学を卒業してから数年が経過する若手職業人が持っている、現在就いている仕事と大学で経験した授業との関係の認識について、聞き取り調査の結果を分析して明らかにすることである。聞き取り調査は同一人物を対象として2時点で行われているため、その2時点間の比較を行う。

これまでの「大学から職業生活への移行」をテーマとした先行研究に関して、次の類型化が可能である。第1の類型（以下、類型1と呼ぶ）として、選抜に着目するものが挙げられる。いつ誰がどのような基準によって候補の学生を選抜するのかという関心から「類別」に埋め込まれている新規大卒労働市場の特徴を明らかにする研究（竹内 1995）、大学卒業者の増加や企業の労務管理慣行の変化に着目しつつ、就職活動や企業の選考基準の変容を明らかにする研究（荻谷・本田編 2010）が行われてきた。第2の類型（以下、類型2と呼ぶ）として、カレッジ・インパクト研究が挙げられる。主として質問紙調査の分析によって大学での経験の内容を問うものである。社会化を促す他者との関わり、経験や努力に関する認知に着目するもの（山田 2012）、就職後の社会化や能力向上に対する学生時代の経験の影響を明らかにするもの（溝上・松下編 2014）、大学の経験を独立変数、就職先の企業規模等を従属変数とする数量的な分析（平尾ほか編 2013）、学生時代の学習習慣が結果として将来の所得を上げる「学び習慣仮説」の検証（濱中 2013）、友だち関係の重視と就職後の配属等についての満足観の関係についての研究（中原・溝上編 2014）などが行われてきた。

本論文に関係する類型2の研究の特徴は、学習以外の多様な経験を独立変数に入れることである。たとえば、アルバイト・サークル活動、対人関係の豊かさといった項目を含んでいる。こうした独立変数の設定は、卒業後の職業生活において「コミュニケーション能力」や「社会人基礎力」が重要

であるという主張や、大学での学習はそれらの能力と比べて「役に立たない」という世評に沿うものである<sup>1</sup>。すなわち、類型2の先行研究はこれらの見解に根拠を与えるという点で問題を残している。なぜなら、大学における教育の重要性を等閑視させてしまうからである。確かに多数の変数の中において学習の重要度は相対的に低く感じられるという調査結果がある一方で<sup>2</sup>、そのことは必ずしも学習自体にまったく意味がないことを示すわけではない。学生は大学における学習で将来の職業に必要な知識、技術を身に付けていないとまでは言えないのである。そこで、本論では大学での学習経験に焦点を絞ることによって、仕事と大学での学習との関係の特徴の一端を明らかにすることを課題とする。その際、転職研究における当事者による経験の意味付け(安藤 2019)を参考とする。若手職業人が過去の学習経験を振り返ったときの、その仕事との関係についての認識に着目するのである。

## 2. 分析の対象と方法

### (1) 聞き取り調査の対象者

分析の対象は学生時代に法学部または社会学部(それらに類する学部、学科を含む)に所属していた卒業後4年目の職業人の聞き取り調査(第2回調査)のデータである。これらの学部は専門職の養成を目的としているわけではない一方で、たとえば、前者では事実を判例に沿って説明するような練習、後者では社会調査の練習などを通じて、事実を何らかの枠組みに沿って整理する学習が重視されると考えられる。そうした経験を通じて、仕事で役立つことのできそうな知識、技術の習得が可能であると推測される。また、卒業後4年目は最初の異動を経験し始める時期であり、一つのまとまりのある仕事ができるようになって、その範囲内で仕事の全体像を把握できるようになる頃である<sup>3</sup>。

調査対象者は2013年と2014年に実施したアンケート調査「大学での学びとキャリアに関する調査」<sup>4</sup>の回答者の中で、聞き取り調査への協力を応諾し、かつ、調査担当者が実際に連絡をとることができた者である。聞き取り調査は第1回調査として2015年から2016年に、第2回調査として2018年に実施した。第1回調査の対象者は法学部出身者、社会学部出身者合わせて20名であり、第2回

<sup>1</sup> 経済産業省によって提唱された「社会人基礎力」は仕事を遂行するための専門性を取り上げない一方で、コミュニケーション能力を重視する(二宮 2009)。また、「役に立つ」という論点に関して、人文系の研究者によって大学における人文学・社会科学は産業界からの要請に応えること、すなわち「テクネー型」の有用性に関する論理に回収されることに対して異議が唱えられていることもある(渡名喜 2018)。

<sup>2</sup> 東京大学大学院教育学研究科大学経営・政策研究センターが2009年に実施した「大学教育についての職業人調査」では、「大卒社員」を対象として大学時代の勉強や生活に関して現在の仕事や生活の基礎としての重要度を尋ねている。「友人、先輩、後輩との交流」を「とても重要」と回答した割合48.7%であり、他方、「授業に関連した学習」を「とても重要」とした割合は18.2%であった。大学時代の「交流」が学習よりも重要であると見積もられている一例である。出所 <http://ump.p.u-tokyo.ac.jp/crump/cat77/cat83/post-7.html> (最終閲覧日:2020年1月14日)

<sup>3</sup> 労働政策研究・研修機構が2016年に実施した、全国の常用労働者300人以上の企業を対象とした調査によれば、ジョブ・ローテーションの頻度として最も多いのは3年毎で約28%、次に多いのは5年毎で約19%であって、さらに、新卒入社後初めての転職が生じる時期は最も多いのが4~5年目の約25%、次に多いのが3年目の約21%である(労働政策研究・研修機構 2017)。これらのことから卒業後4年目はキャリアの節目の一つと考えられる。

<sup>4</sup> 調査の概要は次のウェブサイトに掲載されている。

<https://sites.google.com/site/manabitoca/> (最終閲覧日:2019年10月25日)

調査の対象者は第1回の対象者のうち連絡がついた14名である。その一覧は表1に示すとおりである。

表1 調査対象者一覧

番号	学部	性別	大学 種別 (注)	大学 所在地	第1回調査		第2回調査	
					調査時期 (就職後年数)	業種	調査時期 (就職後年数)	業種
法01	法	女性	私立B群	関西	2016年7月(2年目)	製造業	未実施	
法02	法	女性	私立A群	関東	2016年7月(2年目)	卸売業→金融業	2018年10月(4年目)	金融業を継続
法03	法	男性	私立B群	中京	2016年7月(2年目)	運輸業	未実施	
法04	法	男性	私立A群	関東	2016年7月(2年目)	金融業	2018年9月(4年目)	金融業を継続
法05	法	男性	私立A群	関東	2016年7月(2年目)	IT業	2018年12月(4年目)	IT業を継続
法06	法	女性	私立A群	関東	2016年8月(2年目)	金融業	2018年11月(4年目)	別の金融業
法07	法	女性	私立A群	関東	2016年8月(2年目)	運輸業	未実施	
社01	社会	女性	私立B群	関東	2015年8月(1年目)	サービス業	2018年9月(4年目)	別のサービス業
社02	社会	男性	私立B群	関東	2015年9月(1年目)	サービス業	2018年10月(4年目)	公務へ出向中
社03	社会	男性	私立A群	関東	2015年9月(1年目)	IT業	2018年12月(4年目)	IT業を継続(転職予定)
社04	社会	女性	国公立	関東	2015年10月(1年目)	金融業	2018年10月(4年目)	金融業を継続
社05	社会	男性	私立B群	関東	2015年10月(未就職)	(在学中)	2018年9月(3年目)	製造業→サービス業→求職中
社06	社会	男性	国公立	関東	2015年10月(1年目)	公務	2018年10月(4年目)	公務を継続
社07	社会	女性	私立B群	関東	2015年11月(1年目)	小売業	未実施	
社08	社会	女性	私立B群	関西	2016年5月(2年目)	教育→IT業	未実施	
社09	社会	女性	私立B群	関西	2016年5月(2年目)	金融業	2018年9月(4年目)	金融業を継続
社10	社会	男性	私立B群	関西	2016年5月(2年目)	金融業→小売業	2018年12月(4年目)	小売業を継続(転職予定)
社11	社会	女性	国公立	関東	2016年6月(2年目)	製造業	2018年10月(4年目)	製造業を継続
社12	社会	女性	私立B群	関西	2016年6月(2年目)	小売業	未実施	
社13	社会	女性	私立B群	九州	2016年6月(2年目)	国際関係→国際関係	2018年11月(4年目)	別の公務

(注) 私立大学 A 群とは一般入試の偏差値 60 以上、私立大学 B 群とは同 50 以上 60 未満を意味する(偏差値は河合塾の大学入試情報サイト kei-Net (<http://www.keinet.ne.jp/>) に掲載されているものである(最終閲覧日: 2017 年 12 月 15 日))

## (2) 聞き取り調査のデータ

聞き取り調査は第1回調査、第2回調査ともに、1人につき90～120分程度、半構造化面接法によって行った。第1回調査では出身地域、大学所在地などの基本的なことから加えて、大学時代の学習の内容や方法、就職活動で経験したこと、現在の仕事の状況な

表2 大学時代の経験と現在の仕事内容(法学出身者)

カテゴリー	概念	具体例
法学の知識	1. 法学の知識を仕事で使う	保険に関する法律
	2. 法学の知識を仕事で使わない	法務部に配属されない
	3. 就職後に役立つとわかる法学の学習経験	宅建の学習をして気付く
就職後に身に付ければよい知識	4. 勤務先での研修による知識の獲得	プログラミングの研修
読書の習慣	5. 仕事に関連する読書をしている	資格取得のため
	6. 読書の習慣がない	小説も読まない
学習の習慣	7. 資格取得のための学習	税理士
	8. 自主的な英語学習	アプリを使う
	9. 捨てられない六法全書	何となく
汎用的スキル	10. 論理的であることの重視	法学部で身につけた
	11. 法人顧客とのコミュニケーション	顧客と社内関連部署との仲立ち
	12. 個人顧客とのコミュニケーション	外回り、飛び込み営業
PCの操作	13. 文章ソフトの利用と大学時代の経験	大学での授業経験あり
	14. 表計算ソフトの利用と大学時代の経験	大学での授業経験あり、授業経験なし
	15. 仕事で利用する専用ソフトウェア	税金計算ソフトウェア
大学の講義に対する評価	16. 英語の講義への高い評価	英語による法学の講義
	17. 意味を見出せない法学の講義	判例に対して興味がない

表3 大学時代の経験と現在の仕事内容（社会学出身者）

カテゴリー	概念	具体例
社会学の知識	1. 社会学の知識を仕事で使う 2. 社会学のゼミの経験は今でも重要 3. 社会学の知識は役に立たない 4. 社会学の知識だけでは視野が狭くなる	アンケートの実施 仮説検証のプロセス 自覚がない 経済の知識に疎い
社会学以外の知識	5. 社会学以外の分野の知識を仕事で使う 6. 留学生との交流経験が仕事に役立っている 7. どのような講義も役に立っていない	簿記の授業経験 授業でいろいろなことに気付く 学歴取得だけに意味がある
汎用的スキル1—ライティング	8. 学生時代のPCによる文章作成経験 9. 学生時代の添削経験 10. 文章作成の仕事はあるが、学生時代の経験は関係ない 11. 自筆の手紙を書く	提案書の執筆 先生からのダメだし 各国語によるフェイスブックの更新 先輩を見習って書く
汎用的スキル2—コミュニケーション	12. 個人顧客とのコミュニケーション 13. 法人顧客とのコミュニケーション 14. 職場内のコミュニケーション重視志向 15. 後輩の面倒をみる 16. 転職の際にも求められるコミュニケーション能力	顧客の自宅訪問 地域の行事参加 鍛えようのない人間性 ミスのフォロー 公務員試験でも面接が課される
学習の習慣	17. 教育機関での学び直し 18. 独学による学び直し 19. 勤務先での研修による知識の獲得	専門学校に通う 簿記の勉強 推奨される自己啓発
知識とそれを得るべき時期	20. 大学生のときに勉強しておくべき 21. 就職後に勉強すればよい	統計学 簿記
PCの操作	22. 仕事での表計算ソフトの利用 23. 仕事でのプレゼンテーションソフトの利用 24. 仕事での各種ソフトウェアの利用	関数、ショートカットキー フォーマットを模倣する フォトショップ、インデザインの利用
現在の諸活動	25. 仕事につながるボランティア 26. 読書・新聞購読の習慣	学習支援ボランティア 日経新聞を購読して社会情勢を知る
大学の講義に対する評価	27. 印象に残る講義は現在の仕事に関係ない 28. 印象に残る講義は良い経験であった	宿泊を伴う調査経験 日本文学の講義

どについて尋ねた。その結果の分析によって、現在就いている仕事に対する大学時代の学習の意味は、就職してから事後的に見出されることがあると指摘されている（二宮 2018）。第2回調査においては、雇用形態や収入、1週間のスケジュール、仕事の内容や水準、得意・不得意な仕事、仕事への満足・不満、大学時代に学んだことで役に立つもの、大学時代に身に付けるべきだったこと、異動・出向歴、キャリアの展望について尋ねた。

分析の方法は修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチ（M-GTA）（木下 2007）を採用する。グラウンデッド・セオリー・アプローチ（GTA）はB. グレーサーとA. ストラウスによって提案され、その後も開発が進められた質的研究法の一つであり、聞き取り調査等のデータを客観的に切片化して、その切片化されたデータに名前を付けてまとめていく方法である。具体的には、まず文字起こしされたデータを法学出身者と社会学出身者とで二分して、それぞれを分析対象としてまとまりのあるグループとする。次に、ワークシートを作成して、「概念」名、「定義」、「具体例」、「理論的メモ」を記載する。ワークシートは一つの「概念」につき一枚作成され、複数枚のワークシートを比べて、似たものを一つの「カテゴリー」とする。以下では「概念」名に下線を付し、「カテゴリー」をすみかっこで表すものとする。一つの「概念」につき「具体例」は複数存在するものの、紙幅の都合から一つまたは二つのみを挙げることにする。法学部出身者については表2に示すように7つのカテゴリーが

作成された。また、社会学部出身者については表3に示すように9つのカテゴリーが作成された。

### 3. 第2回調査から得られた内容

#### (1) 法学出身者

学生時代の学習と現在の仕事に関係することや、あるいは、しないこととして挙げられたものは次のとおりである。まず、【法学の知識】についてである。「保険的な部分だと、ちょっと法律が絡んできたりはするので、たまに見ることはあるんですけど。(見るというのは、具体的には?) 保険業法だったり。あと、割賦販売法とか」(法05)(= 1. 法学の知識を仕事で使う)。「(法律を使うことってないですか?) ないですね。特に法務部に配属されたこともないので」(法02)(= 2. 法学の知識を仕事で使わない)。「宅建はもう取ったんですけど(いつ頃取られたんですか?) 入職してから1年目(略)民法とかやっぱり、何も知らない状況で始めるよりは、多少なりともAがいてBがいてとかっていうのが、多少は身についたかなと思って。(大学時代に、まさか自分が宅建を取るとかって思っていられなかった?) あんまり思ってなかったですね」(法04)(= 3. 就職後に役立つとわかる法学の学習経験)。次に、【就職後に身に付ければよい知識】である。「(法学部卒でも御社であれば、SEとして活躍できる?) そうですね。文系のほうが多いですね。(略)入社して最初の3カ月間、徹底的にそういうシステムのなところをゼロから教えてくれるってところと、配属されてからも定期的に研修があるので(略)プログラミングは正直どうにでもなる」(法05)(= 4. 勤務先での研修による知識の獲得)。

現在の仕事に関する日常の習慣について、次のようなものが挙げられている。まず、【読書の習慣】の有無である。「(仕事に関連する本って、どういう本になります?) 資格取るためだったりとかの本だったりとか、あとは直接資格には影響しないけれども、たとえば不動産の関係の本」(法04)(= 5. 仕事に関連する読書をしている)。「(本って読まれます?) 最近は読まないです。(小説とかも読まないですか?) 小説も読まないです」(法05)(= 6. 読書の習慣がない)。次に、【学習の習慣】である。「英語とか、税理士系の勉強とか、あとは銀行業務検定っていうのがあって。いろんな科目があって、法務とかは取りやすいかなあと思って勉強しています。(略)FPは持っていて、証券外務員は今ですね」(法06)(= 7. 資格取得のための学習)。「自分でやっているだけで。(新聞を読むとかですかね?) ネットでいろいろアプリとか英語の文献があるのでそれを読んだり。(略)オックスフォードとかで出している本があるので、そういったものも使って。新しいのをいろいろやるよりは復習したほうが良いと思って、たまに学生のときのノートを見返したり」(法02)(= 8. 自主的な英語学習)。「(会社法の勉強をなさっている?) コアな部分ではないですけど。民法、刑法と比べて。(たとえば、会社とかご自宅に今でも六法とかって置いています?) まだ取っています。(今どきネットのほうが良いような気がしますけど) でも、何となく捨てられないです」(法06)(= 9. 捨てられない六法全書)。

学生時代の学習には関係しないものも含めて、現在の仕事の内容や特徴として挙げられたものとして【汎用的スキル】がある。「(法律を勉強したことで、何かご自身が変わったこととあってありませんか?) 論理的に話そうとは。(話す?) 論理的に、文章を書くにしても、ある程度論理的に話したり書いたりするっていうのは、もし法学部じゃなかったら、その能力は低かったかな」(法 02) (= 10. 論理的であることの重視)。「問い合わせの内容を仕分けて、各部署に連携をするような、ちょっと中継ぎのようなところ」(法 02) (=11. 法人顧客とのコミュニケーション)。「外回りで、飛び込みでその会社に売ることもあったし、割り振られた事業所、私は\*\*\*だったんですけど、その中のお勤めの人に売る。(略) (ノルマとかあったんです?) 目標値が与えられて、やらないと詰められるみたいな」(法 06) (12. 個人顧客とのコミュニケーション)。次に【PC の操作】である。「(ワードはどのくらいにお使いになりますか? 契約書とか作られるんですかね?) 契約書だったりとか、重要事項説明書だったりとかも作りますね。あとは、お客さんに説明する資料なんかも、全部『ばばば』って。(略) 大学でも IT の授業、自分でパソコン室に行って、練習して試験受けなさいみたいのがあったので」(法 04)、「(今のお仕事の書くものというのは、それは先輩から教わる感じでしたか?) 先輩のを見つつ、自分で考えて書くっていう感じ。文章の書き方というか、文章の組み方的なところは多少は大学のときのレポートとか、ちょっとは関わっているのかも」(法 05) (=13. 文章ソフトの利用と大学時代の経験)。「お客様情報の管理、全部エクセルで。(略) 大学で IT の必修の授業があったので、パソコンのスキルなんか今も役には立っているかと。学部関係なく全員が大学 1 年のときに必修で」(法 02)、「(大学時代はそういうこともなさっていました?) やってなかったです。(じゃあ、就職されてから?) はい。(エクセルも就職してから勉強した感じになりますか?) 勉強したというか、もう。(やらざるを得ない?) うん。見よう見まね」(法 05) (=14. 表計算ソフトの利用と大学時代の経験)。「\*\*\*税はそれ用のソフトがあるので、それを使ったりもするんですけど、例えば\*\*\*を売却したときに、入ってくる売買代金に対して」(法 04) (=15. 仕事で利用する専用ソフトウェア)。

最後に、【大学の講義に対する評価】として肯定的なものと否定的なものがある。「アメリカの法学部の授業をそのまま英語でやるっていう授業を取っていて、専門用語も全部英語でやっていたので (略) あっちのロースクールの授業をそのままやってもらえたので、免疫もついたり、転職の面接のときにちょっと言えるというか、使えるのは役に立ったかなと思います」(法 06) (= 16. 英語の講義への高い評価)。「法律の授業だと、もちろん判例を読むんですけど、自分になじみのないようなことがあったので、あんまりしっくりこなかった。(略) 判例でこういうトラブルがあって、このときはどういう判決になりますかかって言われても興味を持ってない」(法 02) (=17. 意味を見出せない法学の講義)。

## (2) 社会学出身者

学生時代の学習と現在の仕事に関係することや、あるいは、しないこととして挙げられ

たものは次のとおりである。まず、【社会学の知識】についての肯定と否定である。「アンケートやったりするんで、そういうときに。(アンケートやるんですか?) 入場者アンケートみたいな。大規模だと500人とか。(略)(社会調査やっていたんですよね?) やってました。(略)ゼミじゃなくて、社会調査士の課程の授業で」(社02)、「分断された情報をつなげて何か大きな戦略で\*\*\*という大げさですけど、目標というかまとめて分析をして伝えるみたいなのが大学時代もやっていることが多かったのかな。情報集めをして、これが何につながるのかを考えるっていう。ほかの学問でも通じるころはあると思いますけど、仮説を立てて分析を進めていくみたいなのは結構社会的な感じ」(社11)(= 1. 社会学の知識を仕事で使う)。「(ゼミのグループで作業すること?) そうです、グループで作業したりとか、輪読したりとか、ディスカッションしたりとかっていうところは多少あったかな。(略) グループワークでの仕事とかプレゼンテーションとかっていうところは間接的には役立ったかなとは思いますが、社会的なところ、専門で習ったところというところはどうですかね。論文を書くときに仮説立てて検証して結論出すっていうところは、会社だとPDCAとか言ったりしますが、その発想自体」(社02)(= 2. 社会学のゼミの経験は今でも重要)。「スキルとかっていうことで、そこで身につけた社会的な知識とか、教養的な知識っていうのは、残念ながらあんま活用されたなっていう自覚はないですね」(社06)(= 3. 社会学の知識は役に立たない)。「社会学部にいると経済関係の視点っていうのがどうしてもない。(略) マーケットのこととか、会社の経営関係だとかいうのを知らずに卒業」(社04)(= 4. 社会学の知識だけでは視野が狭くなる)。【社会学以外の知識】についても肯定と否定がある。「簿記の授業とかもいちおう受けたんですけど。(略) 資格取ったのは入社してからだったんですけど。(略) 特に勉強するときに基礎的な概念は理解している」(社02)(= 5. 社会学以外の分野の知識を仕事で使う)。「本当によかったですよ。大学卒業して、より思うのが大学すごい自分の今のアイデンティティになっているって。(略) いろんな国の人がいたんですけど。でも、そこもそうだし、あとはみんなの生き方っていうか、同じ授業を一緒に取るでも姿勢の違いうか」(社13)(= 6. 留学生との交流経験が仕事に役立っている)。「(製造の現場で夜勤もあって大学で学んだことって何か役に立つことってありましたか。どうですかね?) まったくないです。(略) 社会学部なんて無関係なことにはなりません(略)(そうすると大学にいった意味みたいなもの、ご自身としてはあまりないみたいなことになります?) 学歴のほかにはないことになりますね」(社05)(= 7. どのような講義も役に立っていない)。

学生時代の学習には関係しないものも含めて、現在の仕事で必要となる汎用的スキルとして挙げられたものは次のとおりである。まず、【汎用的スキル1—ライティング】である。「提案書を書きますし、メールとかも書きますし。それがどういう、説得ある文章っていうものかっていうと、ちゃんと現象と事象と、それに対しての原因、要因に対する解決策っていうところがちゃんと。(略)(文章の書き方というのは、そうすると、大学でやった、勉強したことが生きています?) そうです。私はどっちかという硬すぎるって言われ」(社

01) (= 8. 学生時代のPCによる文章作成経験)。「卒業論文ってあれだけの長い、しかもちゃんと筋の通ったものを専門家である大学の先生がきちんと見るものを作る。(略) ダメ出しをくらって持って行ってはだめ、持って行ってはだめ (略) あそこで経験をしなかったら結局社会人になってから、また別のタイミングで苦労していた」(社 03) (= 9. 学生時代の添削経験)。「\*\*\*課のフェイスブックとかを更新するんですけど。日本語、英語、たまに\*\*\*語とか書くことあるな。(略) 堅すぎないですけど、結構ちゃんと書かなきゃいけないのかなと思って。でも、『やさしい日本語』をつけたりとかをするときもあります。(大学では文章を書く練習って、何か授業でありました?) いや」(社 13) (= 10. 文章作成の仕事はあるが、学生時代の経験は関係ない)。「便箋を買ってお手紙とかを書いて。なかなか連絡が取れない先だとか、何かをしていただいたとき、お礼のお手紙とかを。(自筆なんですよ?) 自筆ですね。(略) 私も最初はあまり、そこまで意識してやってなかったんですけど、先輩がやっぱり、しっかり仕事されている先輩とかを見ると」(社 04) (= 11. 自筆の手紙を書く)。次に、【汎用的スキル2—コミュニケーション】である。「度胸がついたことは自分でも、ちょっとひいたんですけど (略) まったく知らないお客さん、名前ぐらい、情報でしかないんですけど、まあ普通に家行くとか。よくやってるな、自分と思うときがあります。行って、ピンポンってして (大学生だとできない、怖いですか?) そんなん絶対やってないですし」(社 09) (= 12. 個人顧客とのコミュニケーション)。「地域の行事に参加したことはありますね。(略) 転勤したばかりの頃だったんですけど街の春の桜が咲く頃のイベント行事があつて。(略) 朝早く来て、屋台とかの」(社 04) (= 13. 法人顧客とのコミュニケーション)。「職業訓練とかでは鍛えようのないコミュニケーション能力とか、あるいは人間性っていうか、それが私には欠けているんじゃないかと、そう思うんですね。この\*\*\*事務の仕事でも、職場では浮いていたというか、周りになじめていなかった感じがしますね。(略) 大切なのは、大学の授業時間中に教えられることじゃなくて、裏の部分というか、たとえば飲み会だとか人づき合いだとか、そういうことのほうがずっと重視されているんじゃないかなという気がします」(社 05) (= 14. 職場内のコミュニケーション重視志向)。「先輩が私と同じで、\*\*\*卒業して、今研修に行っていて。(略) (先輩は、何か悩みを抱えている感じとかします?) でも1年目の子とかは、こないだ泣いていました。私も泣いたから大丈夫。でも、何で泣いたか今は忘れていてからみたい。(本当に涙を流すってことですか?) そうです。結構泣くんですよ、みんな。いろいろ、何かミスとかしたら結構」(社 09) (= 15. 先輩の面倒をみる)。「公務員試験は1次試験と2次試験。つまり、筆記試験と面接に分かれているところが多いんですけど、その筆記試験にはまず受かって、面接で落ちる、その繰り返しなんです。(略) (筆記試験は通るけれども、次の面接でうまくいかないことが、これまでいくつかあったという感じですか?) 毎年ありました」(社 05) (= 16. 転職の際にも求められるコミュニケーション能力)。

現在の仕事に関係する日常の習慣や、それに関連する考え方について、次のようなものが挙げられている。まず、【学習の習慣】である。「(1年半ぐらい、専門学校ですか?) そ



うですね。(略) 通算で100万円ほどかかっていると思いますね。(略) 広報で使っていたフォトショップっていうのも、元は学校のほうで初めて扱わせてもらって。(略) スキルを身につけたい、人脈を見つけたい」(社06)(= 17. 教育機関での学び直し)。「今、英語の勉強しています。昨日 TOEIC 受めました。(略) 結構外国の方いっぱいいらっちゃって、話しかけられたりとかするんですよ。そういうときに、答えたいのに答えられない自分が」(社10)、「管理会計の知識がすごく求められるので、簿記の勉強をしています。(略) ただ大学時代は全く。そういうことをしていた子もいましたけどやってこなかったの」(社11)(= 18. 独学による学び直し)。「機会は与えられていると思います。任せられている部分だとか。\*\*\*がとても自己啓発を推奨しているので、やったぶんだけの自己啓発どれだけ積んだかっていうの、上はしっかり見てるいので。(略) 業界の出版が出している実務に関連するようなテキストを読んで、問題、解答用紙を送って添削が返って」(社04)(= 19. 勤務先での研修による知識の獲得)。そして、【知識とそれを得るべき時期】への言及があった。「しっかり勉強していれば。(統計学みたいな授業ですかね?) そうですね。統計基礎のようなかたちで心理学と社会学の。(略) ある程度 KPI って数字的な指標でもって。(キー・パフォーマンス・インディケーターですか?) 病院建てるでも道路作るでもそれだけのお金かけてどれだけの効果があるのって」(社03)(= 20. 大学生のときに勉強しておくべき)。「簿記とか。(略) たぶん大学のときやっても興味ないんですよ、きっと。(ないですよ、ね。だから) だから別にいいです。(略) だから、別にそのときはそれでよかったと思います」(社09)(= 21. 就職後に勉強すればよい)。

学生時代の学習には関係しないものも含めて、【PC の操作】は以下のとおりである。「関数に関してはしょうがないかなって思う部分はあるんですけど、本当にコントロールキーとシーでコピーして、コントロールキーとブイで貼りつけてみたいな、その基礎ぐらいは知らなかったかな自分みたいな。(就職なさってから、いわば OJT 的な感じで慣れていったってことですかね?) 新卒のときはショートカットキーのテストみたいなのをやらされたんですよ。(略) (エクセルの関数なんかも、じゃあ就職なさってから?) そうですね。(ちょっと言い方変ですけども、就職されてからでも間に合うというか、エクセルは?) 間に合うと思います」(社01)、「(大学のときにエクセルの授業とあってありました?) まったく。(そうすると、エクセルとかはご自身で、あるいは仕事しながら身につけた感じですか?) 高校時代に少しそういう授業があったので、そこで少しは基本的な関数とかは身につけていたんですけど、実際仕事をやっていく中で覚えてくことが多かったですね」(社11)(= 22. 仕事での表計算ソフトの利用)。「具体的に何か指導があったというよりは、会社のこれまでの過去の提案資料なんかを見てみて、フォーマットのようなものを見てみて、こんなものかなということだまねして書くということが多かったです。(それらと卒論はつながらないですかね?) 卒論なんかは、それこそ 100% 文章で、その文章の中に根拠が明確に仕込まれているかたちでないといけないうのがあると思うんです。逆に、パワーポイントなんかは、特に企業はそういうふしがあるかなと思うんですが、あまり書き込み

すぎるとかえって興味を失ってしまったり」(社 03) (= 23. 仕事でのプレゼンテーションソフトの利用)。「広報紙と、あとはホームページの運営っていう、紙とデータっていう二つになっていまして、広報紙が月刊で二つ。(略) フォトショップを少し、全く今の仕事と関係なく趣味とかでやっていたので、写真のレタッチとか。(略) 自分でインデザインとか」(社 06) (= 24. 仕事での各種ソフトウェアの利用)。

その他、仕事に関係する【現在の諸活動】というものがある。「子どもたちに勉強を教えて、終わったらみんなと遊ぶボランティアとかもしていて。(略) 始めるときのきっかけは、僕とりあえず教育系のこととかに接点がなかったんで、何かしようと思って」(社 10) (= 25. 仕事につながるボランティア)。「直接関係しているかっていったら難しいところではあるんですけど。日経新聞を読んで社会情勢だの経済情勢だの気にするようにはしているんで、気にしなきゃいけないんですけど。経済関係ではなくて、政治関係とか社会関係のそういうの、ある程度理解するうえで社会学の自分の専門のことだったりとかいうのは役には立っていると思います」(社 04) (= 26. 読書・新聞購読の習慣)。最後に、【大学の講義に対する評価】である。「泊まりで行ったところは基本的に全部覚えているっていう。(略) そこでいろいろ、皆さんに話を聞かれたんでしたっけ?)聞きました。(略) だからといって、別に今の仕事とはそんなには結びついてはない?) そうですね」 (= 27. 印象に残る講義は現在の仕事に関係ない)。「日本文学から日本の近代化を見ていく授業ですね。(略) (留学生も関心持つようなすごくテーマですよ) そうですね。『沈黙』とか。(略) すごく自由にそのクラスでは意見が言えたなっていう自分の実感があって。(略) もやもやしてする感情、絶対に大事だと思って、それは言葉にしたいのかも大切だから見過ごさず」(社 13) (= 28. 印象に残る講義は良い経験であった)。

### 3. 考察

#### (1) 第 1 回調査と第 2 回調査との比較

第 1 回調査でその時点での仕事に関連する大学での学習についてのふりかえりにおいて、以下のことが挙げられていた (二宮 2018)。まず、法学では「ふりかえってゼミナールでの学習以外は役に立っていない」、「ふりかえって役に立つ授業もあった」、「学習観が転換した」、「習慣が変化した」、「仕事で日常的に法律用語に触れている」といった内容である。次に、社会学では「ふりかえって仕事で使える文章能力が身に付いた」、「ふりかえって専門知識が有用である」、「ふりかえって学習の経験そのものが間接的に役立つ」、「仕事に関する生涯学習の必要性」ということが挙げられていた。

他方、第 2 回調査の法学においては、第 1 に対象者によって、1. 法学の知識を仕事で使う、2. 法学の知識を仕事で使わない、3. 就職後に役立つとわかる法学の学習経験、16. 英語の講義への高い評価、17. 意味を見出せない法学の講義、18. 印象に残る講義は現在の仕事に関係ない、と大学時代の学習についての評価が分かれていた。このような対象者による評価の相違は、第 1 回調査でも見られることである。第 2 に、第 1 回調査ではあまりな

かった「学習の習慣」が語られていることが特徴である。7. 資格取得のための学習、8. 自主的な英語学習、というものである。社会学においても、第1に同様に対象者によって、1. 社会学の知識を仕事で使う、2. 社会学のゼミの経験は今でも重要、3. 社会学の知識は役に立たない、4. 社会学の知識だけでは視野が狭くなる、8. 学生時代のPCによる文章作成経験、9. 学生時代の添削経験、10. 文章作成の仕事はあるが、学生時代の経験は関係ない、11. 自筆の手紙を書く、と大学時代の学習についての評価は分かれている。第2に、第1回調査から引き続き、仕事に関する生涯学習の必要性が継続して提起されている。17. 教育機関での学び直し、18. 独学による学び直し、19. 勤務先での研修による知識の獲得、というものである。法学、社会学ともに、就職1、2年目に行われた第1回調査時点での認識と、就職4年目に行われた第2回調査時点での認識とではあまり大きな違いはないと言えることができる。対象者全員が2回の調査時点の間に従事する仕事の内容が変わったと言うものの、仕事に役立つかどうかという観点での大学時代の学習経験に対する意味づけに変化はなかった。

## (2) 「学び習慣」仮説との関わり

そこで、第2回調査の結果に焦点を絞って考察を続けてみる。枠組みとして参考となるのが先行研究の整理において言及した「学び習慣仮説」である。「学び習慣仮説」とは「大学時代の学習が卒業時の知識を高めて、その経験が就職後に学習を継続する習慣につながり、その結果として将来の所得が上がる」というものである（矢野 2009）。この従属変数を所得とする研究に倣って就職後の学習習慣に関係する要因を探ると、現在の仕事で使う大学時代に学習した知識が関係していることがわかる。

法学では対象者4名中3名が1. 法学の知識を仕事で使うことに言及していた。既述の「保険的な部分だと、ちょっと法律が絡んできたりはする」（法05）以外に、「建物建てたりとかっていう話が多いんですけど、その知識は重要かなとも思って。（略）法律に縛られている分野だと思うんで、そこの知識を増やしていくっていうのは必要で。（略）民法とかも直接関連してくるところなので、何々条、何とか条でこうなるっていうのが出てくる場所もあるので」（法04）、「会社法をやっている。（略）今の配属の部のマネージャーが気に入ってくれて、取ってくれたっていうふうには聞いていて」（法06）というものがあつた。そして、同時に、この3名が7. 資格取得のための学習に言及している。既述の「英語とか、税理士系の勉強とか、あとは銀行業務検定」（法06）以外に、「ほかにもいろいろあつて、相続士みたいなのが最近、国家資格じゃないですけどあつたりもして、そこら辺も取ってもいいのかなあとか思いますし。（略）結構、基本的にはFPの内容が仕事に直結するような感じなので、2級取って」（法04）、「基本情報技術者試験は受かんないやいけなくて、そのあと、もっと上の応用情報、いろんな機能、システム・アーキテクトとかいろいろ、取れるものはどんどん取って（それはご自身で土日に勉強するとかですか？）とか、仕事終わってから」（法05）というものである。他方、1. 法学の知識を仕事で使うことに言及していない1名は、

仕事で用いるわけではない英語学習をしているものの、7. 資格取得のための学習への言及はなかった。

社会学においても同様の傾向がある。既述のとおり、対象者 10 名中 2 名が 1. 社会学の知識を仕事で使うことへ言及していた。また、2 名が 2. 社会学のゼミの経験は今でも重要へ言及していて、既述の「論文を書くときに仮説立てて検証して結論出すっていうところは、会社だと PDCA とかいたりしますが、その発想自体」(社 02) 以外に、「大学の勉強とかだったら、ぱっと思い浮かぶのはゼミとかでやったようなこと。たとえば、自分の部分を調べて、発表して、討論するっていう」(社 10) というものがあつた。さらに、2 名が 9. 学生時代の添削経験へ言及していた。既述の「あそこで経験をしなかったら結局社会人になってから、また別のタイミングで苦労していた」(社 03) 以外に、「大学の文章にしる、会社の文章にしる何かを提案したりとか、自分の意見主張、ないしは結論が必ずある、それを伝えるための論拠っていうのは、組み合わせは共通してるかなと思うので、その大きな枠組みですね」(社 01) というものがあつた。そして、この 5 名(社 02 が重複している) 全員が、18. 独学による学び直しに言及している。既述の「今、英語の勉強をしています。昨日 TOEIC 受けました」(社 10)、「管理会計の知識がすごく求められるので、簿記の勉強をしています」(社 11) 以外に、「会社だと有志とかで読書会とかもするので(たとえば具体的には?) 最近だと『ジョブ理論』とか、あとは『ファスト&スロー』とかですかね」(社 01)、「就職してから取ったのは IT パスポートで。(略)(簿記も独学?) 独学ですね、はい。」(社 02)、「あとは統計検定。あらためて興味があつて受け直したんですが、3 級に受かり、2 級に落ちたところで 1 回やめてしまって、2 級ぐらいしっかり取っておけばよかったなというぐらいです。(統計検定受けようと思ったきっかけみたいのってあるんですか?) それは仕事のこともかかってくるんですが」(社 03) というものである。他方、社会学の知識やゼミ、添削経験への言及がない一方で、独学による学び直しへの言及があるのは 1 名だけであつた。

すなわち、法学においても社会学においても、大学時代の学習経験が現在の仕事に関連していると認識する層と、現在学習をしている層に重なりがある。その因果関係を聞き取り調査の結果に依拠して指摘することは困難であるものの、学生時代の学習についての職業的レリバンスについての事後的な認識と就職後における学習経験の積み重ねに関係があることが示唆されるのである。

### (3) まとめと残された課題

第 1 回調査時点での結論は、職業的レリバンスに関する認識が事後的に形成されていることであつた。ふりかえってみて大学での学習が仕事に役立っていると認識できるようになるのであつて、在学時点では大学での学習と将来の仕事とを結びつけることが難しいというものである。第 2 回調査では、第 1 回調査の結果と大きな相違点はなく、職業的レリバンスの認識の内容は対象者によって異なっているものの、職業的レリバンスがまったくないと否定する対象者は 1 名のみであつた。

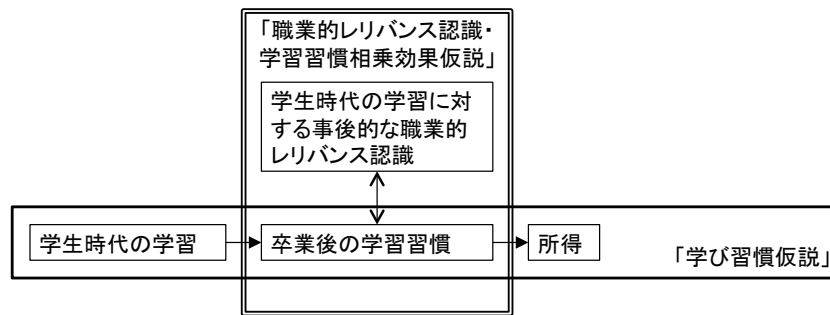


図1 卒業後の相乗効果

残された課題は3つある。第1に、第2回調査の結果で示された仕事に関連する学習を現在行っていることについてである。現在の仕事に関する学習を行う習慣と、学生時代の学習についての職業的レリバンス認識に関連があるのだとして、そのことを「職業的レリバンス認識・学習習慣相乗効果仮説」と名を付ける場合に、図1に示すような関係を描くことができる。横長の四角形で示されているのが「学び習慣仮説」である。学生時代の学習が卒業後の学習習慣につながり、それが所得に影響を及ぼす。そして、縦長の二重線の四角形で示されているのが「職業的レリバンス認識・学習習慣相乗効果仮説」である。その四角形内部の上下方向で示す矢印は卒業後の学習習慣と事後的な職業的レリバンス認識が相互に関係していることを意味している。学生時代の学習に支えられている卒業後の学習習慣があることによってレリバンス認識が高まり、また、レリバンス認識が高いことによって卒業後の学習習慣が継続されるということを意味している。このことはあくまでも仮説であり、「学び習慣仮説」においても課題である大学入学前の時点での学習習慣の影響も含めて、今後その特徴を明らかにする必要がある。第2に、第3回調査の実施についてである。同一人物を対象とする聞き取り調査を継続するとして、その時期と内容を考える必要がある。学生時代の経験が忘れられたり美化されたりする問題が生じることが見込まれる。第3に、法学、社会学以外の分野での検討である。職業的レリバンスが想定しにくいと想定される人文系の分野や、反対にそれが在学中から想定しやすい教育学や経営学といった分野での調査を進めなければならない。また、大学卒業生を対象とした調査については、その実施の相対的な容易さの理由から質問紙調査が選ばれる傾向があるものの、こうした聞き取り調査も平行して行うことが「大学から職業生活への移行」に着目する研究の充実にとって必要である。

## 引用文献

- 安藤りか 2019、『転職の意味の探究—質的研究によるキャリアモデルの構成』北大路書房。
- 濱中淳子 2013、『検証・学歴の効用』勁草書房。
- 平尾智孝・梅崎修・松繁寿和編 2013、『教育効果の実証—キャリア形成における有効性』日本評論社。
- 荻谷剛彦・本田由紀編 2010、『大卒就職の社会学—データからみる変化』東京大学出版会。
- 木下康仁 2007、『ライブ講義 M-GTA 実践的質的研究法—修正版グラウンデッド・セオ

- リー・アプローチのすべて』弘文堂。
- 溝上慎一・松下佳代編 2014、『高校・大学から仕事へのトランジション—変容する能力・アイデンティティと教育』ナカニシヤ出版。
- 中原淳・溝上慎一 2014、『活躍する組織人の探求—大学から企業へのトランジション』東京大学出版会。
- 二宮祐 2009、「コンピテンシー政策の政策移転—『社会人基礎力』を事例として」『〈教育と社会〉研究』19、55-63頁。
- 二宮祐 2018、「学生時代の学習経験を省みる—聞き取り調査の結果から」本田由紀編『文系大学教育は仕事の役に立つのか—職業的レリバンスの検討』ナカニシヤ出版、125-150頁。
- 労働政策研究・研修機構 2017、『JILPT 調査シリーズ No. 174 企業の転勤の実態に関する調査』労働政策研究・研修機構。
- 竹内洋 1995、『日本のメリトクラシー—構造と心性』東京大学出版会。
- 渡名喜庸哲 2018、「日本の人文—社会—学の危機と哲学」福井憲彦編『対立する国家と学問—危機に立ち向かう人文社会科学』勉誠出版、129-173頁。
- 山田礼子 2012、『学士課程教育の質保証に向けて—学生調査と初年次教育から見えてきたもの』東信堂。
- 矢野眞和 2009、「教育と労働と社会—教育効果の視点から」『日本労働研究雑誌』588、5-15頁。

## 追記

本研究は JSPS 科研費 [18H03657](#) の助成を受けたものです。度々の聞き取り調査に応じてくださった皆さまに感謝いたします。